

忠誠と摂理

— ジョゼフ・ド・メーストルの帰属意識 —

大野 英二郎

サヴォワ⁽¹⁾サルデニア王家の旧都シャンベリーは、東西を巍峨たる山並みに挟まれて、北方のブルジェ湖を經由しローヌ河へと流れ込む谷間の源流に位置している。沼沢地帯に唐松の幹を打ち込んだ基礎の上に構築された市街は、構造的な規制の故に、中世以来の建造物と街区を現在に至るまで変えることがない。その中央を横断するボワニユ通りは、イタリア風のアーケードを連ねて、小高い丘の麓へと至り、そこに市街を睥睨するかのようサヴォワ公の城郭がそびえている。城門の前には男性二人のブロンズ像が設置されているが、彼らがこの町に対していかなる感情を抱いていたかを知る人は多くはないであろう。それこそは我々がこれから観察の対象としようとするジョゼフ・ド・メーストルとその弟グザビエの像に他ならないのである。

反革命思想家、神権政治論者として知られるジョゼフ・ド・メーストルはこの地で一七五三年、フランソワ・グザヴィエ・メーストルの長子として生まれ、サヴォワ王国の首都トリノで法学を学んだ後、一七九二年まで司法官として職務に精励する日々を過ごした。⁽²⁾つまりこの地方での生活や近隣の村で過ごされた休暇の体験などが彼の幼年時代を形作るのだが、彼にとって後年シャンベリーが意味するものの中でその自然や風土はほと

んど重きをなさないであろう。この点については兄弟の間でも異なり、小説家、画家たり得たグザヴィエの場合は地方の森、山、川が深く心に刻まれることになる。⁽³⁾しかしジョゼフが故郷に対して抱いた思いは決して単純なものではありえなかった。

ジョゼフ・ド・メーストルが、厳格な家父長の権威に対してきわめて従順であった青年時代⁽⁴⁾から、自己の将来を父親の人生に重ね合わせて思い描いていたであろうことは疑いを入れない。なぜなら父フランソワ・グザヴィエの経歴こそは典型的な法服貴族のそれであったからである。そもそもメーストルの先祖はフランス、ラングドックの出身であって、一七〇五年ニースで平民の家に生まれ、司法官としてシャンベリーに着任したフランソワ・グザヴィエは、一七五〇年地元貴族の娘との婚姻を果たし、一七六四年サヴォワ元老院副議長になり、一七七八年にはその功績を評価されて貴族に叙せられる。このように社会的上昇が実現されて、地位、名誉、資産などを獲得しえたことは、メーストル父子があげて国家の体制に肯定的であったのみならずその権威の源泉である国王に忠誠を誓った理由でもあるだろう。ジョゼフにとってもサヴォワ王国の一地方で司法官として勤務する安定した人生が流れていくはずであった。彼は司法官の心得としてその不偏不党性、「いわばすべての人間的情愛を取り去ること、故郷も、肉親も、友人も（……）離れて判断をなすこと」を強調し⁽⁵⁾、官吏としての彼はあくまでピエモンテ政府との関係によって自己を規定する。テクノクラートであることを天職と心得れば、サヴォワはいわば一任地に過ぎない。官僚の心得として居住する地方とは関係を浅く保ち（それがトリノ宮廷の政治的意向であることはいうまでもない）、意志的に生活圏を同質の官僚間の社交に限っていたことなどは、地方の社会や風土に対するこの積極的関心の欠如を説明するであろう。しかし彼の地方に対する感情が否定的なものであったわけでもない。メーストルは、自分なりの関わり方で、生まれ育った

サヴォワに愛着の感情を抱いていたのであった。

後年、ロシア滞在中にメーストルは次のように述懐する。

「思い出を消し去りがたいことは二つあります。太陽と友人たちです。私の諦念がおわかりになるでしょう。けれども太陽を犠牲にすることも、もう一方について心安らかでいられるなら、さして難しいことではないでしょう。」⁽⁶⁾

彼の世界把握とは人間関係を中心にすえていて、わけでも近親者との血縁関係が自己の存在を規定し支える根本であった。それに比べれば、北国ペテルブルグから思いやる故郷の自然も望郷の念をかき立てるものとはなり得ず、たとえば彼の書簡の中で言及されることもほとんどない。日輪を冠した赤い太陽が暗い森林の上を滑っていった、いつまでも暮れやらぬ夏のネヴァ河を描写して壮大な『ペテルブルグ夜話』冒頭の一節が、弟グザヴィエの用意した素描⁽⁷⁾を下敷きにしたという事実もまた、彼の自然に対する感受性が稀薄であったことの証左であろう。それは彼の知的、思弁的傾向を示すものでもある。

メーストルの思考において人間関係が重要であるとするなら、サヴォワに対する彼の意識が社会的状況を反映して陰影に富んだものになるのは当然であろう。一八世紀、政治的権力を集中し人事においても優勢に立ったピエモンテによる支配はサヴォワの側に根深い屈辱感を生じさせていた。王家発祥の地という歴史的正当性への自負にもかかわらず、サヴォワ地方の政治的位置は従属的なものにすぎず、ピエモンテとの間には絶えざる緊張関係が存在していた。メーストル自身もこの点については中央政府に対して批判的であって、反政府分子と見なされる程であった。ただし彼はピエモンテより派遣された司法官の子弟として地方住民の屈折した感情を直接共有するものではない。ピエモンテに対する反感は、あくまでその地方ないしは政府の手法に限定さ

れるもので、サヴォワ王家の権威には及ばなかった。⁽⁸⁾たとえばトリノ政府に対して批判的であった彼が一七七五年『ヴィットーリオ・アマデオ三世頌』を著して国王を礼賛するのは、王権に対して以前から抱いていた崇敬の念を説明するものであろう。⁽⁹⁾あるいはその意図が反語的なものであって政府を批判するのが本旨であったにせよ、少なくとも国王に対しては恭順の意を表しえたことに、彼の臣下としての意識を確認することができるであろう。王家と宮廷政府を峻別する意識はメーストルの言説を理解する上できわめて重要な要因を形成することになる。いずれにせよ革命勃発まで、王国の地理的政治的構造の中で、彼の立場は明確に重層的であり続けた。⁽¹⁰⁾

政治的状況のみならず、サヴォワの文化的、社会的特殊性も考慮しなければならない。この地方が王国内で周縁的な存在に甘んじていたことは疑いを入れないが、さりとてその精神風土が外の世界に対して閉ざされていたわけではなかったからである。古来南北ヨーロッパ交易の要衝にありながら二大国フランスとオーストリアにはさまれた弱小国であるという地理的な状況の故にか、進取の気性、未知への憧憬が強くサヴォワ人の心をとらえていた。それは、新天地ロシアに同化してコスモポリタンとしての生活を選び取るメーストルの弟グザヴィエの人生によって一つの典型として示されることになるだろう。シャンベリーで記された彼の処女作が『我が部屋周辺の旅』という閉塞と脱出の物語であったことはきわめて示唆に富んでいる。⁽¹¹⁾さらに一七八〇年この二兄弟が気球に乗ってシャンベリー上空一三〇〇米の高みに達したという逸話⁽¹²⁾も、彼らのうちに秘められていた鬱勃たる脱出の願望を象徴しているかに思われる。やせた大地、厳しい気候の山国から、ヨーロッパの各国へ出稼ぎ労働者として移動していく若者達は「サヴォワの若い衆」という表現で広く知られてもいた。またフランスにおける検閲は領土外のフランス語文化圏にあるシャンベリーでの出版活動を活発にさせるなど、

この地方は先進的な精神活動の発信地でもあった⁽¹³⁾。

後年ジョゼフは故郷での青春時代を次のように回想する。

「一人になる機会をこの頃できるだけ増やそうとしているのだが、私は肘掛け椅子に頭を持たせかけ、そこで、部屋の中で誰にも邪魔されず、大切なことどももうちやって、暗く計りがたい未来に向かい合い、そして昔のことを思い出すのだ。おまえもよく知っているあの小さな町で、別の椅子に頭を持たせかけて、自分たちの狭い交際以外はすべて矮小な人間と些末な事柄でしかないと考えて（なんたる思い上がり）、ひとりごちていたものだった。「自分はここで、岩場に張り付いた牡蛎のように、生きて死ぬことを運命づけられているのだろうか。」あのころ私は大いに悩んでいた。頭は詰まらぬことでもいいで、その重みに疲れ、打ちひしがれていた。けれどもなんとというその埋め合わせがあったことだろう。自分の部屋を出さえすれば、おまえたちを、自分の良き友と会うことができたのだった。ここではすべてが壮大だが、私は孤独なのである」⁽¹⁴⁾

サヴォワの地方性を閉塞的なものとして捉えていたことは明らかであろう。それは、一方では所属する社会階層のゆえに強く国家組織の中に組み込まれていながら、他方それに自足することのできぬ知的地平を有している、自己の存在と意識の乖離を認識せざるを得なかったからに違いない。故郷に対する不満、脱出の願望は弱小国の狭隘な一地方都市に身を埋めることを肯んじない青年の野心でもあったろう。しかしそのような思いも、結果的には、肉親への愛着を超えるものではなく、また司法官としての保証された未来を賭すほどのものでもなかった。法服貴族たり得たメーストル家の持つ保守性、身分的限界であろうか。けれども皮肉なことに、彼自身がサヴォワに対して抱いていた距離感にもかかわらず、ピエモンテにおいてはまずサヴォワ人として認識

され、サヴォワ＝サルデニア宮廷からは常に掣肘が加えられることになる。⁽¹⁵⁾彼のフリーメーソンへの加入は、体制に組み込まれた官吏という制約の中での、批判的精神の発露として位置づけられるだろう。⁽¹⁶⁾

隣接する二大国はサヴォワ王家にとっては恒常的脅威であったが、メーストルは父祖の国であるフランスに對しては畏敬の念と親近の情を抱いてもいた。⁽¹⁷⁾そもそもサヴォワにおいてはフランス語が使用されていたのであつて、⁽¹⁸⁾メーストル自身、フランス語文化圏に生まれ育つて、イタリア語をよくしなかったことは、サヴォワ王家における彼の将来を限定するものになるであろう。⁽¹⁹⁾しかし宮廷ではフランス語が用いられていたし、ピエモンテのトリノでは、イタリア語とフランス語の中間に位置するとも言ふべき地方語が使用されていた⁽²⁰⁾、事実上の二言語併用地域であつた。このような一八世紀末におけるサヴォワ王国の地理的かつ文化的複合性が、フランス語圏に属していたメーストルの社会的可能性をも保証していたのだつた。少なくともフランス革命の勃発までは、サルデニア王国にとってオーストリアの存在の方がより深刻な脅威として位置づけられていて、フランスとの関係はむしろ良好に推移していたことも付け加えるべきであろう。⁽²¹⁾

メーストルはフランスをあくまで範とするに足る隣国として位置づけ、ヨーロッパにおける中心的存在として考え続ける。この視点は、たとえばほぼ同時代、スイス生まれのバンジャマン・コンスタンがフランスを野心の対象としてとらえ積極的に政治に参加し社会への同化を図っていたことなどとは明白な対照をなす。しかしながらメーストルの親仏的態度はサルデニア宮廷では胡散臭いものとして不興を買い、「危険な」フランス新思想の影響下にある「フランス人」に⁽²²⁾Francescoと呼ばれて疎んじられ、フランス革命に際してはジャコバン派とさえ見られて、彼を異分子と見なす傾向はその晩年にまで及ぶであろう。⁽²³⁾このようにメーストルの同一性は、その出生と社会的境遇そして政治的、文化的関心のゆえに、サヴォワとピエモンテ、さらにはフラン

スの三極間のきわめて微妙な関係に立脚したものであった。

「私の運命は不調和と矛盾の集積であって、出来したことを顧みればまるで『青い鳥』や『親指小僧』を読むかのようであろう。決して変わらなかった唯一のこと、それは家族意識と我々の青春の思い出である」⁽²⁴⁾

* * *

内面に様々な矛盾をはらみつつも司法官としての人生をサヴォワ＝サルデニア王国の一都市で全うしたに違いないメーストルの人生行路が激変するのは、ひとえにフランス革命の影響に他ならない。⁽²⁵⁾ 我々の関心に照らせば、革命による情勢の変化は彼の帰属の特徴と、それが内包する矛盾を次第に明確にしていく過程でもある。一七九二年九月フランス革命軍の侵攻によって彼は生地であるサヴォワを脱出、アルプスを越えてピエモンテに入る。⁽²⁶⁾ 中央政府の権力のありように対する批判的な立場は、情勢が決定的な変化を開始するこの年にまで及んでいたから、彼が旧体制を支持して、国王と運命を共にしたことは必ずしも自明なことではなく、その主張が一定不変であったわけでもない。⁽²⁷⁾ たとえ革命の前後を通じて国王に対する敬愛は変わらなかったにしても、ピエモンテの政府に対する言説は明らかに変質しているのである。また主張の激烈さ、反語性も次第に強まっていく。後述するように彼が信条を翻すことを許容する情勢は繰り返し現れたし、選択の見直しを促す機会は再三にわたって出来る。たとえばフランスによるサヴォワ併合によって住民にはフランス籍が与えられ、親友らの何人かはその道を選択するのだが、彼はこれを拒否するであろう。したがって彼の人生全体を展望すれば、サヴォワからの脱出は意志的な選択の結果であったと見るべきであろう。革命の進行による社会の変化、彼によれば破壊を目の当たりにして、それまで無意識的であった思考が論理として形成されていたのである。

サヴォワを離れるに当たっては、フランス側に荷担した人士の行動を裏切りと断じて強く憤っていたことが彼の手記に観察される。

「フランス人達の侵入、豪雨沛然。軍隊の恥すべき敗走。將軍達の反逆あるいは愚行。信じがたく、幾人かの言によれば、不可思議ですらある潰滅。これは政府にとって消し去ることのできぬ恥辱であり、おそらく国家の軍事的滅亡なのだ」⁽²⁸⁾

メーストルは自分のサヴォワからの退去がいわゆる亡命ではなかったと説明する。すなわちピエモンテへの移住は、サヴォワ王家の版図内での単なる避難、移動でしかなく、フランスの亡命貴族とは異なる境遇にあることを強調する。

「私達は決して王国の諸邦を出ているわけではなく、侵略された一地方から侵略されていない他の地方へと移ったにすぎません」⁽²⁹⁾

もちろんその「移動」が彼に何らの感懷を引き起こさなかったわけではないであろう。とりわけ後年それが回想されれば、人生において決定的な選択、故郷との離別であったことが認識される。悲壮な愛郷心の表明でもあろうか。

「一七九二年フランス人がサヴォワに侵入し、我々がアルプスを越えて国王と運命を共にしたとき、人生の浮沈を共にたどる伴侶に私はいったのだった。とある岩陰のことで、今でもありありと思い出すことが出来る。「い」とい人よ、今日、我々のこの一步が全てを決定するのだ。我々の運命が生涯にわたって決まるのだ。」(……) 以後私に向かって希望は何度か微笑んだが、それは闇夜の稲妻でしかなかった。私の境遇は悪くなる一方であった。(……) 祖国、財産、家族、そして君主さえ、全ては予想通り失わ

れた⁽³⁰⁾」

けれども当時は事態を不可逆的なものとしてとらえてはおらず、どれほどの忍従を強いられることになるか予想もつかなかった。

やがてメーストルはローザンヌに移り、マレ・デュ・パンなどと連携を図りながら、情報収集、諜報活動に専念⁽³¹⁾し、革命の阻止と、革命勢力に対する反攻に全精力を注ぐことになる。つまり彼は政府の批判者から忠実なる臣下へ、体制の擁護者へと変貌していくのである。シャンベリー、トリノ、ローザンヌと流離を重ねるにつれ、彼は自己の存在を規定しているものの本質を認識していったのであった。

たとえばフランス新体制によって統治されることになったサヴォワに宛てられた『サヴォワの一王党主義者からの手紙』(二七九三)の中でメーストルは地方の伝統や歴史を称揚して、革命に同調したサヴォワ人に新体制からの離反を呼びかけ奮起を促す。それがフランス革命の誤謬を論証するためであったにせよ、王国の内政問題や対立は捨象され美化される。九二年まで批判の急先鋒であったメーストルは、ピエモンテ政府の開明的性格をことさら強調して、平和裡に実現された土地解放など革新的な政策やその公正と寛容を称揚するのである。⁽³²⁾ 祖国の存在は次のように説明される。

「ある者の祖国とは、どのような形態であれ、彼の主君が統治している国全体を示す。そしてその国の下位区分はそれぞれ、より狭い意味での、個別の祖国を形成しうるだろう。しかしそれら個別の利害は全体の利益に従属するものであるから、普遍的な祖国を損なうものでもなければ、主権の行使を疎外するものでもない。さもないければ政府が存立し得なくなるであろう」⁽³³⁾

文脈に即して敷衍すれば、メーストルはまずサヴォワの地方性を尊重していわば愛郷心を認め、次にピエモン

テに対するより高次の愛国心を想定し、愛国心という概念に二重の構造を持たせる。生活する地方に対して住民が抱く自然な愛着は、国家構造の中に組み込まれて中央政府への忠節へと矛盾なく連続する。フランスによって奪われたサヴォワは、すべからくサヴォワ人の決起によってピエモンテに返還されなければならない⁽³⁴⁾。当時の私信もまた、郷土サヴォワ地方への愛着を示しつつ、故国サヴォワ＝サルデニア王国すなわちピエモンテ政府を積極的に評価する。

「私はピエモンテ人が決して嫌いではありません。彼らがどれほど優れているか知っております。しかし私は自分の国⁽³⁵⁾ nation が、少なくとも人々が好きです」

このようにメーストルは、外からの危難に直面して、サヴォワとピエモンテの間に自身の存在を規定せざるをえずに味わっていた葛藤を棚上げする。双方の土地のどちらからも遠ざけられて現実的関係を失ったからこそ、従来の憂悶から自由になりえたのだともいえようか。喪失によって獲得し、流離によって憧憬を深めるという逆説は、彼の生涯を通じて繰り返されることになるであろう⁽³⁶⁾。

興味深いことに、『王党主義者の手紙』の中でメーストルはピエモンテの特殊性をも指摘している。つまりサヴォワ王国の中央ピエモンテがイタリア半島の枠組みにおいては周縁空間であり続けるという認識である。

「ピエモンテ人は決して完全にイタリア人になることはできず、フランス語は、平俗なものとして、ポー⁽³⁷⁾河北部のガリア地方に常に存在し続けるであろう」

それはイタリア経略の意図を伝統的に持ち続けていた宮廷への牽制であったのだろうか、それとも、数十年後の未来を予期して、メーストルが感じた自己の文化的、社会的同一性への不安であろうか。いずれにせよ、フランス、サヴォワ、ピエモンテ、イタリアと、メーストルの周辺には異質な文化圏が浸透あるいは反発しあい

ながら連鎖隣接していたのであり、彼は複雑に影響しあう諸勢力間のダイナミズムの中できわめて微妙な自己同一性を、すなわち自己の帰属を確認しなければならなかった。このような特殊性の尊重は彼の思考の中で重要な要素を構成している。

たとえば上の引用のようにある地方ないしはある国の人々と彼が記すとき、同朋あるいは住民というエスニックな意味でそれらの語を用いていることは明らかであろう。しかしながら、「国民」という新概念が一七九〇年前後には広範に普及していたにしても、「国民国家」に直結するような政治的思考を旧体制側に身を置いていたメーストルが論理的に共有しうることはなかった。⁽³⁸⁾ またいわゆる一八世紀的理性を悪として否定する彼は、人類の普遍性ないしは普遍的人類という概念を空虚なものとして退けて、人間の個別性のみを認めていた。

「この世界に「人間」などというものは決して存在しない。私が、生まれついて、出会ったのはフランス人であり、イタリア人であり、ロシア人等々であった。モンテスキューのおかげで、ペルシャ人などのいることをも知っている。しかしながら「人間」というものについては、決してお目にかかったことはないと言明しなければならない」⁽³⁹⁾

抽象的思弁や理論ではなく、歴史や経験に裏付けられた伝統、社会に根付いた価値観こそを誤りなきものとして重視すべきだというのが彼の立場であって、個人の理性、つまり人為的思弁とは、錯誤以外のものではあり得ない。個人の同一性は生まれ育った環境や風土、歴史、文化と密接な関係を持ち、具体的諸条件を捨象して考えることは意味をなさない。個別性尊重の論理をメーストル自身に当てはめれば当然サヴォワとの関係、あるいはピエモンテ政府の官僚としての自己規定が明らかになるはずだが、興味深いことに、少くともこの時点で彼が自らの優先的に認めるのは後者の要素であって、生地サヴォワの要素は次第になおざりにされて、地方

よりも国家の枠組みが強調されていく。個人的次元で捉えれば、彼の政治的論考は自己の存在の矛盾を解消して現状を合理化するものとして位置づけられるだろう。

愛郷心ないしは愛国心への考察は、その対象である国家の本質と関連づけられて、『至上権Ⅱ主権論』(一七〇四—未完)⁽⁴⁰⁾においても展開されている。国家とは何か、メーストルはルソーに反駁して、次のように説明する。曰く、社会は人間の創り出したものでなく、人間にとって本質的な状態はその社会性にあり、社会契約とは幻想にすぎないから、革命によって樹立された政体は全くの無意味である。人間の理性は個人の能力に限定されては全き虚無に他ならず、個人の理性の誤謬を正すためには、宗教的教義と政治的教義が混合融合した国民的理性を作り上げなければならない。それには「先例Ⅱ偏見」に従うことが肝心である。⁽⁴¹⁾先例Ⅱ偏見は多様であるが、持続的な政治制度には共通の基盤として宗教と愛国心が観察される。すなわち愛国心とは拡大された連帯感であって、その機能は次のようにも説明される。

「愛国心とは何か。それは私のいう国民的理性であり、個人の自己犠牲である。信仰と愛国心は現世において奇跡を生み出す力なのであり、いずれも崇高なものである。(……) どちらもただ二つの言葉に還元される。すなわち従順と確信」⁽⁴²⁾

個人は至高の存在に柔軟な鎖によってつながれていて、その自由は全体の構図を乱さぬ限りにおいて許されるものでもあるとはすでに表明された確信であった。⁽⁴³⁾個人は自己犠牲としての愛国心によって至高存在に帰依することになる。愛国心が神の摂理にそうものであることは明らかであろう。社会と同時に主権は誕生したのであり、その権威は神に由来するものであるから、君主こそは真正の主権者であって、君主制こそが本来の政体である。君主とは何より父性的存在であり、臣下との間には家父長的關係を有し、その関係こそが正統的国家

組織を裏付ける。結局、愛国心は君主に対する臣下の忠節に還元されることになる。メーストルは君主への敬愛である「祖国愛」を、フランス旧体制を例に取り羨望と哀惜を込めて、説明してもいる。⁽⁴⁴⁾ 宗教と愛国心はこもごも造物主たる神、主権者たる君主、その臣下である国民の関係を保証する不変の紐帯なのである。つまり臣下が君主に維持し続ける父子的関係を基軸にして均一性を持つ安定した国家構造が成立する。⁽⁴⁵⁾ これをメーストル自身に適用すれば、彼が父性的存在として崇敬せねばならぬのがサルデニア国王であることは自明であろう。彼の君主への忠誠は神に帰依することに他ならず、自己の存在証明ともなる。

かくしてメーストルの言説の中ではサヴォワとサルデニアという二重構造が精算され、サルデニア国王の臣下としての立場に還元されて、国王擁護の論理が明確になる。それはサヴォワの存在が稀薄になっていく過程でもある。さらに彼の著作は単なる政治パンフレットの域に留まらぬ、一国の浮沈を越えた深い射程を次第に獲得していくであろう。フランス革命に代表される、世界が直面している危機についての一連の考察は悲観的現実認識を明らかにし、そこからの脱出の可能性を模索する。彼によれば、革命とは一種の必要悪、懲罰としての悪に他ならない。時代に満ちあふれる混乱と墮落は啓蒙思想によってもたらされたものであり、啓蒙思想はプロテスタンティスムによって、そしてプロテスタンティスムは宗教改革によって作り出されたのであった。⁽⁴⁷⁾ 彼が多用する戦闘的なレトリック、たとえば「プロテスタンティスムは宗教におけるサン・キュロット主義だ」などは決して場当たりのではなく、歴史認識に根ざすものというべきであろう。そのような社会の混乱と墮落の極みに懲罰としての悪が現れたのである。⁽⁴⁸⁾ したがって王政復古などは姑息な政治的妥協にすぎず、彼の理念を再興しうるものとはならないであろう。⁽⁴⁹⁾ 反革命と呼ばれる君主制の復興は逆方向の革命であってはならず、革命とは反対のもの、全く逆の性質を持ったもう一つの根源的変革でなければならなかった。

しかしながら公刊される著作の断固たる主張とは裏腹に、情勢の変化は次第にメーストルに深い喪失感を味あわせていくようになる。一七九六年にはパリ条約によって、国王ヴィットーリオ・アマデオ三世がフランス共和国に屈し、ピエモンテが「中立化」され、王家の主権がサルデニア島に限定される。王国版図の基本的な枠組みの崩壊である。王家はサルデニアへの移転を強いられるが、その島は一八世紀初頭オーストリアとの間でコルシカと交換されたものであって、かつてはスペインによって領有されていた、見るべき産業もないきわめて貧しい地域であった。一七九四年、九九年、一八〇二年と小規模な反乱も繰り返されて、王家と住民の間に父子的信頼関係などはもはや望むべくもない。領土と政治権力は決定的に乖離してしまい、王国自体が流謫を強いられることになったのである。新たな運命を知って、メーストルの日記には絶望が表明される。

「イタリアから恐ろしい知らせが今日届いた。全テガ私ニハ失ワレタヨウダ。もはや祖国も、財産も、本来の意味での君主さえもない」⁽⁵⁰⁾

そして改めて、

「名譽ノホカニ顧ミルモノナシ」⁽⁵¹⁾

という座右銘以外に子孫に残すものないと記すのであった。名譽とは、権威としての国王および教会との抽象的關係以外の何であろうか。それは物質的裏付けを失った国家に帰属する臣下がすることができる唯一の絆であった。

メーストルは一七九七年ローザンヌからトリノへ召還される。

「私の内で驚くべき変化が起こっている。旧来の志向が強固なものになり、漠然とした観念は揺るぎないものとなり、推測は確信へと変わる。(……) 私には自分の天職が見えてきたようだ。四四歳にし

て！」⁽⁵²⁾

現実における政治的無力化の結果、執筆活動だけが自己の理想を追求するために彼に残された手段であった。すでに胚胎されていた観念が確信へと変化するとの言及は、この後に発表、展開された反革命思想が彼の人生において一貫するものであったことの証明でもあろう。その思想は、苛烈な現実を反映して、より辛辣、過激なものになっていく。ローザンヌ時代の著作も乗り越えられなければならない。

「トリノを出立する前に、我が『サヴォワの手紙』の原稿を焼く。フランス革命、あるいはもっと正確にはヨーロッパの革命についていかなる啓示も得ない頃に書かれたものであった。文章を書くに当たったの考え方は間違っていないかったものの、いわば無知の結果として耐え難いものになっていたからである」⁽⁵³⁾

一八〇〇年にはメーストルもサルデニア島カリヤリに移る。それはフランス文化圏からの決定的離脱であった。彼にとっていかなる個人的愛着も発見できぬ土地への移住である。一八〇二年、ピエモンテはフランスに併合されてしまい、王家は地中海上に逼塞を余儀なくされる。やがて一八一四年にピエモンテに復帰した国王が「十余年の眠りから覚めた。」と述懐することになるように、サヴォワ王家にとってはきわめて沈滞した時代が続くことになる。メーストルは現実を甘受しようとする。

「いくつかの不幸な体験の後、私はサルデニアで平穩に経歴をおえることを覚悟するにいたったのだ。自分が死んでしまったものと考えれば、その地方は墓所としてはかなり好ましいものだった」⁽⁵⁴⁾

しかし現実はいかに苦いものであった。ピエモンテ人中心主義はなお力を失わず、宮廷で彼の能力や著作が評価されることはなく、加えてメーストルの言語能力、イタリア語を使用できないことは職務遂行上明らか

な障害であるとあげつらわれた。つまり彼の社会的文化的同一性がサルデニア宮廷へ同化することを妨げる要因として作用するのである。またメーストルは副王カルロ・フェリーチェから疎んじられてもいた。⁽⁵⁵⁾ 地位的にも冷遇が続き、一八〇二年にはペテルブルグへの派遣を受け入れることを強いられる。それは体のよい所払いにすぎなかったが、彼が閉塞的な状況から脱出しうる機会と考えたとしても不思議はなかった。

* * *

ペテルブルグにおける彼の任務は、サヴォワ王家の復興を、フランス、オーストリアに対抗しうるロシア宮廷への外交努力によって実現することであった。⁽⁵⁶⁾ しかし王家の外交戦略が明確であったわけではなく、また状況に応じてそれを修正する明敏さを備えてもいなかった。⁽⁵⁷⁾ 最も正統的な要求であるピエモンテ領有の復活はすでにその可能性を全く失っていた。メーストルは現実的選択肢として領土喪失の補償を、イタリアのいづれの地方かあるいはギリシャの獲得に変更せざるを得ない。フランス国境を変更することが期待できなくなった以上、イタリア半島において少しでも版図を確保しておくことが王国の将来につながると見定めた上での判断であった。⁽⁵⁸⁾ だがカリヤリへの建言は受け入れられず、宮廷は夜郎自大、ピエモンテへの凱旋帰国に執着し続けるであろう。駐ペテルブルグ大使は、当時の外交感覚からすれば非現実的で、すでに失われている主張に固執するドン・キホーテを演じざるをえないのである。さらにナポレオン帝国の出現とその拡大によって、サヴォワ王家の存在自体が地中海上に忘れ去られた一種の亡命政権として、大方から軽んじられるものになってしまう。王国の存在を支えていた体制は次々に滅亡していった。

「私はサヴォワで、ピエモンテで、スイスで、王権が滅びるのを見た。ヴェニスで、フィレンツェで、パルマで、その哀れな骸を目の当たりにしたのだ」⁽⁵⁹⁾

彼は屈辱ばかりか貧窮や孤独までも忍ばねばならない。サルデニア宮廷の弱体化は彼に物質的困窮を強いただけでなく、家族の別離をも長引かせることになる。妻子をペテルブルグに呼び寄せることができたのは一八一四年、赴任以来実に一二年後のことになるであろう。欠落感がペテルブルグ時代におけるメーストルの感情を特徴づける。

「パンもなければ希望もない男であり、祖国もなければ財産もない父親であり、妻のいない夫であり、能力なき代理人であり、職務なき大使であり、肩書きなき貴族であり、位階なき吏員であり、等々」⁽⁶⁰⁾ 懸命の努力と自己犠牲がいささかも報われず評価されぬことや、宮廷の無理解に対する不満を、知人や国王自身にさえに書き送っている。彼は懷疑や絶望に苛まれ続ける。

「私には半分の生しか与えられていない。いつも何かが欠けている」⁽⁶¹⁾ 付与された役割に対する屈託、実現することのおぼつかない外交的使命、自己の存在がほとんどロシア宮廷人士の慈善の対象でしかないという苦渋は消え去ることがない。

「私には祖国も、地位も、官位もない」⁽⁶²⁾ 欠落感のゆえに、彼は奪われているものに思いを凝らすことになるであろう。

この長い忍従の時代に彼を支えたのは、サヴォワ国王は摂理によって導かれ守られた存在であって、その君主に対する忠誠こそは自己を神に結びつけるという確信と、そして家族を思いやる家父長としての自負以外になかった。

「私は誰だ。私はどこにいる。私はどこへ行くのだ。(……) 私は臣下であり、私は大使である。しかし私は父親である。この最後の属性を忘れることは不可能であり、また許されぬことでもあろう。(……)」

もし私が自由であつたら、この国に身を落着けようとは思わないのだが。⁽⁶³⁾

自己の任務、それを支える肉親への愛情、ないしは家父長としての責任感、義務を全うすることだけが彼の矜持であり、遠国にとどまる理由であり、彼自身を支える確実で具体的な存在理由でもあった。ペテルブルグからの書簡はよき夫、よき父親、よき親族としてのメーストル像を浮かび上がらせる。君主と家臣が父子的関係で結ばれていることはすでに観察したとおりであり、メーストルの家父長としての自覚がその延長にあることは明らかであろう。つまり父子的関係がメーストルの世界全体を統べることになる。ただしそれは満たされることなく、彼の渴望をおおらずにはいられない。

「私の人生は悲しく流れていく。(……) 私の年齢では、すべての幻想が消えてしまった。もはや家族しか残されていないが、それも私には奪われている」⁽⁶⁴⁾

このような悲観的現実認識は救済への渴望と表裏一体のものとなって彼の思念は一層強固になっていく。それがきわめて意志的でありながら、しかし合理的ではなかったことは当然であつたろう。

彼に強いられる外交的努力が現実的論理と合致しないことはすでに明白であつた。したがって現実政治とは距離を置いて、いわば理念のレヴェルでの超政治的考察としての宗教論が執筆され、反語的な論理展開が強く志向されることになる。永遠に失われたかに見え、しかしそのゆえにこそ再臨することが必至と確信せざるを得ない、大いなる秩序、大いなる時代への期待が日増しに、彼の内部で高まっていくのであつた。その結果が『ペテルブルグ夜話』である。

一八〇六年に構想され、以後孜孜として執筆が続けられながら完成されることのなかったこの著作は、作者の帰属意識を直接説明するものではない。けれども彼自身「自己の全てを投入した」と言い切つて、彼の世界

観と歴史意識を大成するものであるので、その枠組みを知ることが、メーストルが個をどのように位置づけるに至ったかを理解するために有用であるに違いない。著作はまず悪と受苦の問題について論じる。なぜ現世には悪が存在し、なぜ正義が辛苦せねばならないのか。問題意識がフランス革命によってもたらされたものであることはいうまでもない。善悪が旧体制下の価値基準で測られ続けていることもまた明らかであろう。悪は矯正されることなく、増長を続ける。無辜の民が忍ばねばならぬこのような受苦を、まさに無辜の民が忍ばねばならぬがゆえに、個ではなく人類全体の贖罪と再生につながるものであると作者は説明する。それはキリストによる贖罪によってすでに示されたことでもあろう。人類の歴史が救済への過程であることをどうして疑えよう⁽⁶⁵⁾。したがって救済を前提にすれば、時代の混乱、悪の跋扈は懲罰としての機能を果たすものに違はなく、不可欠な契機として認められるのである。死刑執行人のように、戦争も革命も不可避かつ神聖なものにちがいない。歴史は峻烈苛酷な力としての摂理を明らかにする。「現世における摂理の支配」という著作の副題は、このような作者の意図を要約するものである⁽⁶⁶⁾。けれども悪の効用を認めて来るべき再生を信じるなら、現実になすべきことは何であり、またなし得ることとは何であろうか。メーストルは「人間は摂理の範囲内で自由である」と説明するが『ペテルブルグ夜話』の中で行いえたのは結局、歴史の中での人間の無力を確認し、再生と救済をもたらす摂理の力を信ずることではなかったともいえるだろう。社会の問題も、個の受苦もひとしなみに摂理が解決するであろう。たしかに現実と摂理とははるかに隔たっているかに見える。だが摂理を明らかにすれば、現実の方向は自ずと見極められるに違いない。

このような彼の思考を個人的な次元で捉えれば、自身の苦境を、不条理としてではなく、正当化しようとする試みであったともいえるだろう。メーストルが確信した人智の及ばぬ神の摂理とは、そのまま彼が味わった

混乱の深さといつ果てるともしれぬ苦痛の激しさを裏書きするものであろう。言い換えれば現実の政治的動向に肯定的要素を見いだすことができず、空無化した王国の状況と自己の境遇を説明するためには、彼は来るべき摂理の顕現を想定する以外になかった。未来に信じている一筋の光明から出発する以外に、彼は世界に対峙しうる言葉を持たなかったのである。ただそれによってのみ、革命の結末と、王国の未来と、王国に帰属する自己の正当性を説明することができたのである。

かくして彼の考察は所与の現実から離れ、いわば当為の理念へと移行する。我々の関心に則せば、個の帰属は次のように位置づけられることになる。祖国とは神聖な存在であって、理性による選択の及ばぬものである。しかるに主権は君主の存在に還元される。すなわち、現実における欠陥、欠落にも関わらず、君主への忠誠をあくまで貫き続けることが摂理にそうのであると。

「もし忠誠を誓った君主に主権が滅亡させられたのならば、別の君主を捜すことは許されるであろう。それはちょうど伴侶の片方が死ぬことで解消された結婚と同じものである。(……) しかしこのよう状況以外、いかなることも祖国を捨てることを許されないであろう。政府の欠点を理由とするなどは最低のものであって、各人は自分の政府があるがままに守り、仕えなければならないのである⁽⁹⁶⁷⁾」
それは挫けそうになる彼自身への激励であったのだろうか。彼は流謫の身を意識せざるをえない。

「異邦人は決して旅人以外の存在ではあり得ないのです。(……)「異邦人」という言葉は、「場違い」の同義語として使われてきました。「あなたはここでは異邦人です」といえば「あなたはここにいないべきではないのです⁽⁹⁶⁸⁾」という意味なのです」

「異邦人」との言葉を彼が記すとき、果たして彼はどのように自己の祖国を考えていたのであろうか。たとえ

その故郷サヴォワを思ったにせよ、あるいはかつての祖国サヴォワール・ピエモンテを思ったにせよ、それらの土地はすでに敵対するフランスの領有になっており、まして使命を帯びた彼がそこに戻ることなど許されるはずもなかった。「異邦人」の本質とは異国にさすうという状況の中にこそあるのではないだろうか。メーストルの書簡からは、具体的な祖国への思慕よりも、その喪失感の方が一層痛切に感じられる。国家をめぐる省察は自己の置かれた状況へと環流し、あるいはそれを反映して、内心の苦渋を露わにする。

家族が合流した後にも、サルデニア王国外交官としての職務には変化が兆さず、状況に出口は見えない。しかるに弟グザヴィエ、息子ルドルフとともにロシア皇帝に仕官し、ロシア社会に同化していく。グザヴィエはロシア人の配偶者を得てその地に永住することになるだろう。それを一八世紀的処世、コスモポリティズムの⁽⁶⁹⁾実践と考えればことさら感慨を催すものではないであろう。しかし息子が入隊した日に、ジョゼフは境遇の變化を慨嘆して、懐古的な思いに耽らずにはいられない。それはいまだにうち捨てることのできぬ故郷への思いが表出する機会でもあった。

「彼はサヴォワ元老院の議員になるべく生まれてきたものを⁽⁷⁰⁾」

つまりメーストルの祖国観とは、一方では国王の存在と直結してきわめて観念的なものになりながら、他方では内心に隠された感情として郷土サヴォワへの執着を明らかにする。メーストル自身もまた皇帝アレクサンドルから能力を評価されて、様々な国内改革を諮問されるほか、正式な仕官の誘いを受けてその政治に参画することを慫慂される。それは彼にとってロシア国籍を獲得しうる機会でもあった。しかし次のように答えて皇帝からの要請を謝絶する。

「サヴォワ王家が存在する限り、そして私を使って下さるうとなさる限り、私が職務を放棄することは

決してないでしょう。⁽⁷¹⁾」

手詰まりの亡命政権にすぎず、彼に対しては冷淡酷薄に終始するサルデニア王家への忠節を全うするのである。彼は何よりサヴォワ＝サルデニア王家の臣下でなければならなかった。その帰属だけが異国に派遣され、逆境におかれ続ける彼の運命を正当化し、彼の彼たることを保証し、そしてその未来をも説明しうる唯一の理由であった。やがて一八一七年のイエズス会追放の勅令が彼に出発を強いることとなるように、ロシアはメーストルの奉じるカトリシズムとは基本的に相容れぬ国でもあった。長年にわたってなじんだ北国の風土は最後まで彼を「外国人」として遇し続ける。そして彼もその事実を忘却できない。

しかしながらサヴォワ＝サルデニア王家をめぐる情勢は絶望的であって、君主と領有するとされる地理空間との結びつきはもはや断絶されていた。君主もまた果てしない流離を忍ばねばならない。

「御国には前哨も城塞もなく、ただの沃野にすぎなくなりました。トリノは首都たるべき資格を完全に失い、いまや君主の居所とはなり得ません。陛下は果たして何処に遷御あそばされることになるのでしょうか。⁽⁷²⁾」

かつての版図はしのぶべくもない。王国には領土も子とみなす人民もない。けれどもそれこそ守るべき本質の顕在化ではないだろうか。

「イタリアはいまやきわめて流動的で、様々な野心の対象となるにいたった。しかしピエモンテの解体だけはいかなるものであれ排除しなければならぬだろう。玉座が遷御する方がまだまだからだ。陛下の治める諸邦は一体をなしており、その完成は全体と各部分の適正な関係の結果であった。しかしながら⁽⁷³⁾（……）統治する王家が統治される諸邦よりも大きいという事態が出来した。」

領土と君主の乖離に直面してもためらうことはない。

「もしボナパルトが失脚したとしても、あるいは彼が全イタリアを割譲する羽目に陥ったとしても（ま
ずありえない仮定ですが）、国王、つまり我々が主君はピエモンテ人たることをあきらめても、王たる
ことはあきらめようとなさるべきではないでしょう。⁽⁷⁴⁾」

国王こそが国家の本質なのであり、守るべき価値なのであった。それに比べれば領土は二次的な意味しかない。けれども領土を喪失した国王とはいかなる存在たりうるのか。それはもはやただ忠臣と呼ばれる者たちだけが認める単なる擬制に過ぎないのではないだろうか。こうしてメーストルと君主との間には、観念的な次元ではほとんど一対一の関係が浮かび上ることになる。一七九六年ヴィットーリオ・アマデオ三世が没し、カルロ・エマヌエーレ四世が即位、一八〇二年にはヴィットーリオ・エマヌエーレ一世が王位を継承しているから、メーストルの国王に対する不変の崇敬とは、人格的心服と言うよりは、抽象的権威に向けられたものというべきであろう。王国は君主の存在のみに集約され、メーストルと王国はもはや君主の存在によってしか結びつくことがない。そしてその関係だけが彼の世界を支えるのであった。

とどまることを知らぬナポレオンの軍事的勝利によって情勢は悪化を続ける一方となる。メーストルは、ナポレオンを悪魔の手先として評価、むしろ歓迎する。ヨーロッパ各地への侵攻は破滅を加速し、摂理の存在を証明してくれるだろう。またナポレオン帝国は錯綜するイタリア政治地図を一掃することによって、サヴォワ王家によるイタリア支配は容易になるであろう。王家の栄光はより速やかに実現されるに違いない。建設をするためには破壊が不可欠である。至福をえるためにはあらゆる災厄を引き受けねばならない。なんたる逆説。だがその認識に痛みが伴わぬはずはなく、現実の状況は思い描く未来とは異なって、両者が合致するようには

見受けられない。

「アウステルリッツで全ては失われた」⁽⁷⁵⁾

「サルデニア国王の諸邦は希有で、空前等々の（彼に欠如している倫理性を前提にする「偉大な」という形容詞以外は何であれ冠してもよい）一人の男によって征服され支配されることになった。（……）それは明らかに、いまだかつてこの地上でなされたことのない巨大な革命を遂行するために、摂理によって選ばれた手段であった。（……）マレンゴの戦いの後、ピエモンテの復興は不可能になったということが出来るであろう」⁽⁷⁶⁾

メーストルの努力もまた何の成果にも結びつかないが、所詮それらは現世的出来事にすぎず、彼の世界観を変貌させるものではない。忍従と受苦は摂理への確信を強固にするだけのものではなかった。

* * *

ナポレオン帝国の瓦解は、予期していたとおり、サヴォワ王家によるピエモンテ領有回復のみならずイタリア半島での勢力拡大の可能性をもよみがえらせうる一大転機であった。外交官メーストルがサヴォワ＝サルデニア王家の復興のために自己の責務を果たし続けたことはいうまでもない。⁽⁷⁷⁾しかし外交交渉はペテルブルグからはるかに遠い地で行われ、ロシア皇帝やフランス国王と個人的な信頼関係を持つ彼が参加することを、狭量な宮廷は許さなかった。

一八一四年の第一次パリ条約は、フランスによるサヴォワ地方大半の領有を承認してしまう。メーストルの憤りは、もちろんまずサヴォワ＝サルデニア王家の臣下としての表現を取る。だがそこには、生まれ育った地方への愛郷心とさえ表現できるより個人的な愛着が、再びたぎり出しているようにも観察される。その関心は

彼の内心に長く抑圧されていたのであろう。

「五月三〇日の条約はサヴォワを完全に破滅させた。不可分のものを分割してしまった。四〇万人の不幸な一民族、言語において単一、宗教において単一、性格において単一、年来の慣習において単一、自然境界において単一の民族を三つに分割したのである」⁽⁷⁸⁾

隣国による地方の分割はとりわけ文化的同一性を損なうものとして捉えられる。私信には愛郷心が明確に示されている。

「我が故郷、シャンベリーはフランスに属している」⁽⁷⁹⁾

しかし一八一五年の第二次パリ条約によってサルデニア国王へのサヴォワ全面返還が決定する。それは旧サヴォワ領土の復興であって、一応肯定的に評価されるだろう。つまりメーストル個人と故郷との間のうち消しがたいつながりが再び明瞭に表現される。

「我がサヴォワにはきわめて満足しております。なぜならあらゆる分野で大きな希望が示されおり、とりわけ信条においても才能においても優れた若者達の飛翔が見られます」⁽⁸⁰⁾

もともとメーストルは領土の回復のみに甘んじるものではなく、王家の飛躍を念じ奮闘してきたのであった。ウィーン体制が四列強によるヨーロッパの恣意的な分割と抑圧であって、サヴォワ王家を実質的に封じ込め、イタリア半島の問題を棚上げするものであったことは、彼を大いに憤慨させる。またフランス革命の混乱やナポレオンの脅威から解放されたヨーロッパがきわめて凡庸な形で旧体制を復活させたことも、彼の失望を深めたのであった⁽⁸¹⁾。革命の破産、つまり反革命の成就とは輝かしい正義の時代を到来させるものでなければならなかった。誰がその悲憤を分かťことができようか。

ロシアでの任務を終え、パリを經由して、トリノに帰還したメーストルは一八一七年八月国王に拝謁する。それは長年逆境に耐えて密かに肝胆照らしあってきたと彼が信ずる主従関係を、臣下の側から一方的に確認する瞬間であったといえるだろう。彼は主従が同じ世界観と、同じ時代認識を共有しているのだと確信して疑わない。

「その優渥なる御様子は本来のものとお見受けする。しかし何かしら御悲嘆の色が御身に感じられたように思われ、いや感じられたのである。ゆえに大いに恐懼する。内心これほどの忠誠心が湧く思いがしたことはかつてない」⁽⁸⁰⁾

国王の表情に読みとったと信ずる憂愁は、メーストルのそれまでの苦勞に報いて余りあるものであった。彼の推測が正鵠を射たものであったかはおくとして、主君の苦衷を忠臣が以心伝心、無言のうちに理解したとする様子はほとんど歌舞伎の舞台をさえ思わせる。メーストルにとって主君の憂いに満ちた眼差し以外の何が必要であろう。ロシアで艱難を耐え忍んだ一五年の間、君主との個人的で密やかな共犯関係だけがメーストルを支えてきたのではなかったか。

けれども再び目の当たりにするヨーロッパ政治の動きは彼の苦い感慨を深めるだけのものでしかない。しかも彼に与えられたのは、尚書省長官という単なる名誉職、体のいい閑職にすぎず、経験も見識も手腕も全く評価されない。メーストルは、サルデニア王国の中にいながら、自己の存在が「現実」から遠ざけられていて、活躍の舞台を与えられることもなく、疎外されていることを悟らずに入られない。

擬制の中に生きていた時代が終結し、現実の国際関係の中で判断と決定が求められるようになった時、メーストルはイタリア情勢をどのように認識し、サルデニア王家の役割をどのように予測していたのであろうか。

彼の帰属する国家が具体性を回復した時、それまで強いられていた観念性との間に齟齬を生じるのは避けがたいことであった。あるいはまたフランスが革命の呪縛から解放された時、範と仰ぐべきその現実には彼にとって両刃の剣となる。

たとえば、かつて国民とは主権者たる君主を中心にした集合と定義していたが⁽⁸⁴⁾、いまや再生したフランスを称揚して、一つの国民は一つの言語に他ならないと文化的同一性の紐帯としての機能をも強調することになる⁽⁸⁵⁾。この論理は二重の意味でメーストルにとって苦いものであった。第一に「単一言語国家フランス」はメーストルの故郷サヴォワをも包含するものであって、彼の同一性を否定する。第二にこの論理はサヴォワ王家の国益に対してはイタリア統一を志向することが必要であるとの認識に結びつく。けれどもイタリア半島に「単一文化」の統一国家を実現することは、多文化の複合国家であったサヴォワ・サルデニアの歴史との間に矛盾を生じざるをえず、またその中でメーストルは自己の存在理由を維持することが困難になるに違いない。

出現しつつある新しい世界の様相は、メーストルが決定的に旧体制、旧秩序に属していたことを明らかにする。しかし旧体制が破壊された後の混乱が收拾されて開始されたはずの新秩序とは彼が期待していた世界とは全く異なるものであった。それは彼の無力感を深める要因ともなる。

「私は打ちひしがれ、さらには厭世的になっている。(……) 私はもはや半ば死んでいる。加えて様々な荆棘が心に突き刺さっていて、我が精神はそのうずきを感じている。次第に我が精神は滅んでいく。やんぬるかな。けれども私はヨーロッパと共に死ぬのである、よき道連れとして」⁽⁸⁶⁾

メーストルはあくまで新しい体制、新しい世界を拒否しようとするものの、事態は不可逆的に進行していく。しかもその中で彼はいかなる役割を演じることもできない。

「私の役割は終わった」⁽⁸⁷⁾

このような経緯に立てば、最晩年にメーストルが『教皇論』の完成に努力を傾注したことも理解できるだろう。

「果てしない蛮行と戦争が全ての原則を踏みにじり、ヨーロッパの至上権を未曾有の動乱に陥れ、いたるところに荒廃をもたらした以上、より高次の権力がこのような至上権になにがしかの影響を及ぼしうることは有益なことであった。(……) 巨悪が生じ、大罪が犯され、深い懷疑が生じたときに、教皇がその権威を介入させたのである」⁽⁸⁸⁾

この著作の執筆を急ぐあまり、「現世における摂理の支配」との副題をつけた『ペテルブルグ夜話』が未完に終わったのは象徴的であろう。現実政治に対する深い絶望は、彼のいう、より高次の権力への直接的な期待に変化する。教皇とは一八世紀の長きに渡って存在している未曾有の制度であってその無謬性は明白であり、ヨーロッパにおける君主制は教皇によって作り上げられたのであった。⁽⁸⁹⁾ それゆえ教皇こそは諸君主の誤謬を矯正しうる立場にある。『教皇論』が力説するのは、世界は君主主権が体现する諸民族によって分節化されているものの、全体としては教皇の権威によって教化善導される巨大な共同体であらねばならぬということであった。メーストルの考察は政治を超越して宗教色を強めながら、しかし神学に転じることなく、常に制度としての教会をその対象にし続けて、あるべき秩序を模索するのである。

ウィーン体制のもとでサルデニア王家は旧来の版図を復活する。メーストルがその忠誠を捧げてきた君主は、いまや様々な具体的属性を回復し、まぎれもない現実の政治的勢力へと再生するのである。王家はやがてイタリアへの傾斜を明らかにするにちがいない。そのような王家の戦略は一八世紀以来伝統的なものであり、メー

ストル自身がロシア滞在中に模索した方針⁽⁹⁰⁾でもあった。したがって彼の努力は後世「リソルジメント」の先駆として評価されることになるかもしれない。しかしながら現実の変化は王国を自己の帰属していた過去から決定的に引き離していくものに他ならず、個人的な次元では困惑を深めることになるのであった。メーストルは死の四日前に次のようにしたためている。

「王家はその言語より広大なものにはなり得ないこと、しかしまた玉座はより遠方にまでその威令を及ばさなければより高きものとはなり得ないことを存じております。ところで我々はイタリア人でしょうか、侯爵殿。それがわからないのです。フィレンツェでは我々のことを「両生類」と呼んでおり、ここトリノで我々は「イタリアからの駅馬車が着いた」などといったのです。この疑問から自由になることはないでしょう。言語、言語、侯爵殿、言語なのです」⁽⁹¹⁾

王家の権威はイタリア半島全体に影響力を行き渡らせることによって確固たるものになるであろう。サヴォワ王家によるイタリア統一とは外交官としてのメーストルがつとに構想し、実現に向けて努力を続けてきた究極の目標であった。けれどもイタリア文化圏を包摂することになる版図の拡大は、すでに「両生類」と見なされている彼の存在をより周縁的なものへと変化させるに違いない。ピエモンテが周縁的存在になるならば、さらにその周縁に位置しているサヴォワにおいておや。メーストルの困惑は、王家がかつて保っていたフランス・イタリア両文化圏の中間に位置する地方文化の同一性と現実の政治が完全に乖離し、彼にとって致命的な矛盾が露呈しつつあることに対する不安といってもよいだろう。逆にいえば、彼は晩年にいたるまで、王家に対する政治的忠誠とともに、自己のサヴォワ人としての文化的同一性を失うことがなかった。彼にとって祖国という存在はその生涯の出発点から、ピエモンテとサヴォワの二元的な構造を、つまり政治的要素と文化社会的要

素の二つを備えていた。それらはサルデニア王家が現実政治の中で無力となり、抽象的空間に浮遊することによって両立し、さらには観念的な政治性の中に対立が解消されることが可能であった。しかるに、国家が現実性を回復し、かつてとは異なる様々な属性を獲得していくに及んで、両者はその不一致を露わにする。つまりメーストルの政治意識はその地理的、文化的帰属意識との葛藤を超越することができなかったのである。もとより一八世紀中葉に生をうけた彼の思考を、優れて一九世紀的な概念である「国民国家」の図式で裁断しようとすることは厳に慎まねばならないであろう。しかしながら旧体制サヴォワールサルデニア王家の臣下があくまで国王に忠節を尽くしながらも、自己の存在を「王国」の論理に還元しきれなかったところに、当時進行しつつあった「国家」の決定的な変質を重ね合わせてみることはできるに違いない。

サルデニア王家がやがてイタリア統一の核となることをメーストルはどれほど現実のものとして予期していたのであろうか。イタリア半島統一が未来にわたる王家の栄光の確立であるとしても、サヴォワ人たる彼を疎外する環境の完成であったとすれば、運命の皮肉以外の一体何であったというべきであろう。一八六一年、彼の死から四〇年後のことであった。

註(1) 文化的政治的帰属の曖昧さ、ないしは複雑さが主題となる本稿の場合、固有名詞の表記方法は当然多くの問題をはらむことになる。しかし論を進めるために、ごく便宜的に、現在フランス領のサヴォワに関わるものについてはフランス音を、イタリア領であるピエモンテ地方についてはイタリア音を、その他は慣用にしたがって表記する。サヴォワ王家の人名はすべてイタリア音で扱う。また貴族姓の小辞をどう扱うべきかについても諸説あるが、簡略をむねとして本稿ではこれを省き、たとえば「メーストル」とのみ記すことにする。

(2) François Descostes, *Joseph de Maistre avant la Révolution*, Moutiers, 1894; Robert Triomphe, *Joseph de*

Maistre, étude sur la vie et sur la doctrine d'un matérialiste mystique, Droz, 1968. ほか『王国の歴史』の
らに Paul Guichonnet, *Histoire de la Savoie*, Privat, 1988; Roland Edighoffer, *Histoire de la Savoie*, P. U.
F., 1992など。また19世紀前半の状況全般については Jean Nicolas, *La Savoie au XVIII^e siècle*, Maloigne,
1978を参照した。

- (3) Alfred Berthier, *Xavier de Maistre*, Slatkine, 1984 (éd. orig. 1920), p. 16. ベルサール自身も只の自然への無関心
を記している (*Ibid.*, p. 173)。またデュベシュアンは、そのシヤンヌ体験を甘美な黄金時代と位置づけ、シヤンヌリー
を親密で快適な空間と回想している。この興味深い、「心地よく信頼の置ける交際を通して人生の喜びを味わっているがど
れ程よいか」の井は、デュベシュアンは、それとシヤンヌリーは、「Jean-Jacques Rousseau, *Les confessions*,
Folio, t. I, p. 246.」などの種々な別の青年について述べた物段のなれど、その点のようである。

- (4) Henri de Maistre, *Joseph de Maistre*, Perrin, 1990, p. 34 sq.

- (5) *Ibid.*, p. 84. ほか『ド・メーストルの思想』(2)を参照のこと。具体的には、メーストル自身の *Le caractère extérieur
du magistrat ou les moyens d'obtenir la confiance publique* (1784), *Œuvres complètes de Joseph de Maistre*,
Slatkine, 1979, (Première édition: Lyon, Vitte, 1884), 214-215-216, t. VII, 215-216, 217, 218, 219, 220, 221, 222, 223, 224, 225, 226, 227, 228, 229, 230, 231, 232, 233, 234, 235, 236, 237, 238, 239, 240, 241, 242, 243, 244, 245, 246, 247, 248, 249, 250, 251, 252, 253, 254, 255, 256, 257, 258, 259, 260, 261, 262, 263, 264, 265, 266, 267, 268, 269, 270, 271, 272, 273, 274, 275, 276, 277, 278, 279, 280, 281, 282, 283, 284, 285, 286, 287, 288, 289, 290, 291, 292, 293, 294, 295, 296, 297, 298, 299, 300, 301, 302, 303, 304, 305, 306, 307, 308, 309, 310, 311, 312, 313, 314, 315, 316, 317, 318, 319, 320, 321, 322, 323, 324, 325, 326, 327, 328, 329, 330, 331, 332, 333, 334, 335, 336, 337, 338, 339, 340, 341, 342, 343, 344, 345, 346, 347, 348, 349, 350, 351, 352, 353, 354, 355, 356, 357, 358, 359, 360, 361, 362, 363, 364, 365, 366, 367, 368, 369, 370, 371, 372, 373, 374, 375, 376, 377, 378, 379, 380, 381, 382, 383, 384, 385, 386, 387, 388, 389, 390, 391, 392, 393, 394, 395, 396, 397, 398, 399, 400, 401, 402, 403, 404, 405, 406, 407, 408, 409, 410, 411, 412, 413, 414, 415, 416, 417, 418, 419, 420, 421, 422, 423, 424, 425, 426, 427, 428, 429, 430, 431, 432, 433, 434, 435, 436, 437, 438, 439, 440, 441, 442, 443, 444, 445, 446, 447, 448, 449, 450, 451, 452, 453, 454, 455, 456, 457, 458, 459, 460, 461, 462, 463, 464, 465, 466, 467, 468, 469, 470, 471, 472, 473, 474, 475, 476, 477, 478, 479, 480, 481, 482, 483, 484, 485, 486, 487, 488, 489, 490, 491, 492, 493, 494, 495, 496, 497, 498, 499, 500, 501, 502, 503, 504, 505, 506, 507, 508, 509, 510, 511, 512, 513, 514, 515, 516, 517, 518, 519, 520, 521, 522, 523, 524, 525, 526, 527, 528, 529, 530, 531, 532, 533, 534, 535, 536, 537, 538, 539, 540, 541, 542, 543, 544, 545, 546, 547, 548, 549, 550, 551, 552, 553, 554, 555, 556, 557, 558, 559, 560, 561, 562, 563, 564, 565, 566, 567, 568, 569, 570, 571, 572, 573, 574, 575, 576, 577, 578, 579, 580, 581, 582, 583, 584, 585, 586, 587, 588, 589, 590, 591, 592, 593, 594, 595, 596, 597, 598, 599, 600, 601, 602, 603, 604, 605, 606, 607, 608, 609, 610, 611, 612, 613, 614, 615, 616, 617, 618, 619, 620, 621, 622, 623, 624, 625, 626, 627, 628, 629, 630, 631, 632, 633, 634, 635, 636, 637, 638, 639, 640, 641, 642, 643, 644, 645, 646, 647, 648, 649, 650, 651, 652, 653, 654, 655, 656, 657, 658, 659, 660, 661, 662, 663, 664, 665, 666, 667, 668, 669, 670, 671, 672, 673, 674, 675, 676, 677, 678, 679, 680, 681, 682, 683, 684, 685, 686, 687, 688, 689, 690, 691, 692, 693, 694, 695, 696, 697, 698, 699, 700, 701, 702, 703, 704, 705, 706, 707, 708, 709, 710, 711, 712, 713, 714, 715, 716, 717, 718, 719, 720, 721, 722, 723, 724, 725, 726, 727, 728, 729, 730, 731, 732, 733, 734, 735, 736, 737, 738, 739, 740, 741, 742, 743, 744, 745, 746, 747, 748, 749, 750, 751, 752, 753, 754, 755, 756, 757, 758, 759, 760, 761, 762, 763, 764, 765, 766, 767, 768, 769, 770, 771, 772, 773, 774, 775, 776, 777, 778, 779, 780, 781, 782, 783, 784, 785, 786, 787, 788, 789, 790, 791, 792, 793, 794, 795, 796, 797, 798, 799, 800, 801, 802, 803, 804, 805, 806, 807, 808, 809, 810, 811, 812, 813, 814, 815, 816, 817, 818, 819, 820, 821, 822, 823, 824, 825, 826, 827, 828, 829, 830, 831, 832, 833, 834, 835, 836, 837, 838, 839, 840, 841, 842, 843, 844, 845, 846, 847, 848, 849, 850, 851, 852, 853, 854, 855, 856, 857, 858, 859, 860, 861, 862, 863, 864, 865, 866, 867, 868, 869, 870, 871, 872, 873, 874, 875, 876, 877, 878, 879, 880, 881, 882, 883, 884, 885, 886, 887, 888, 889, 890, 891, 892, 893, 894, 895, 896, 897, 898, 899, 900, 901, 902, 903, 904, 905, 906, 907, 908, 909, 910, 911, 912, 913, 914, 915, 916, 917, 918, 919, 920, 921, 922, 923, 924, 925, 926, 927, 928, 929, 930, 931, 932, 933, 934, 935, 936, 937, 938, 939, 940, 941, 942, 943, 944, 945, 946, 947, 948, 949, 950, 951, 952, 953, 954, 955, 956, 957, 958, 959, 960, 961, 962, 963, 964, 965, 966, 967, 968, 969, 970, 971, 972, 973, 974, 975, 976, 977, 978, 979, 980, 981, 982, 983, 984, 985, 986, 987, 988, 989, 990, 991, 992, 993, 994, 995, 996, 997, 998, 999, 1000.

- (6) Lettre 130, à la Comtesse Trissino, St.-Petersbourg, *OCCM*, t. IX, p. 508.

- (7) *Esquisse du préambule des Soirées par Xavier de Maistre*, in J. de Maistre, *Les Soirées de Saint-Peters-
bourg*, éd. par Jean-Louis Darcel, Slatkine, 1993, t. I, pp. 116-119. これはメーストルの著作の中で最も稀
な風景描写である。この文は、このように述べた。

- (8) Albert Blanc, in J. de Maistre, *Mémoires politiques et correspondance diplomatique de Joseph de Maistre*,
Librairie Nouvelle, 1858, p. 10.

- (9) *Eloge de Victor-Amédée III*, cité par Robert Triomphe, *op. cit.*, p. 92 sq. この『頌』は『マーストル』の1節
「天の怒りが王侯に与える最も不吉な贈り物、憎むべき侯爵の死」(Acte IV, scène VI)を題辞に掲げ、奸臣を誅す
る意図を鮮明にする。

- (10) Cf. François Descostes, *J. de Maistre avant la Révolution*; Henri de Maistre, *op. cit.*, p. 110.

- (11) Cf. Xavier de Maistre, *Œuvres complètes du comte de Xavier de Maistre*, Garnier Frères. 以下の「グザヴィエ」についてもその選択に葛藤逡巡がなかったわけではない。一見自由闊達に諸国をめぐるながら、彼の人生は流離の悲哀に満ちていた。ロシアで彼は次のようにも記す。「私の居場所はいったいどこなのだ。」 fin avril 1803, cité par A. Berthier, *op. cit.*, p.83.
- (12) Jean et Renée Nicolas, *La vie quotidienne en Savoie aux XVII^e et XVIII^e siècles*, Hachette, 1979, p.334 sq.
- (13) A. Berthier, *op. cit.*, p.16.
- (14) Lettre 84, au Chevalier de Maistre, St.-Petersbourg, 14 février 1805, OCJM, t.IX, p.331. 上の「牡蛎殻」の比喩は一八〇三年ペテルブルグに到着した際にも手記の中で用いられている。「三月足らずの間、私は教皇と、ドイツ皇帝と、ロシア皇帝に拝謁した。牡蛎のように岩に張り付いたまま、死んで行くはずであったアロブロンツァ Allobroge というのは大変なことである。」 *Carnets*, 17 mai 1803, p.161. 山国に育ったメーストルが海のイメージを使用するのは、サルデニア島を往反してロシアへと向かった経験が影響しているのであろうか。なおアロブロンツァとは後のサヴォワ地方に南下したケルト人の古名であって、サヴォワ人の自称として使用された。一七九二年革命によって地方が独立した際には、「アロブロンツァ議会」が創設されている。
- (15) J. Mandoul, *Joseph de Maistre et la politique de la maison de Savoie*, Félix Alcan, 1899, p.70.
- (16) Cf. Georges Goyau, *La pensée religieuse de Joseph de Maistre*, Perrin, 1921; Emile Dermenghem, *Joseph de Maistre mystique*, La Connaissance, 1923.
- (17) たゞし *Fragments sur la France*, OCJM, t.I.
- (18) メーストルはサヴォワ人に対してはその言語の純正を訴えるが (*Troisième lettre au royaliste savoyard*)、フランス人に対しては方言が規範からどれほどはずれたものかを指摘して、フランスの文化的優越性への憧憬を隠さない。*Mémoires et correspondances*, p.14.
- (19) Joseph de Maistre, *Les Carnets du Comte Joseph de Maistre, Livre journal 1790-1817*, publié par le comte X. de Maistre, Vite, 1923, (以下「Carnets」略記) p.139, (4 septembre 1799).
- (20) A. Berthier, *op. cit.*, p.39.

- (21) オーストリアに対する警戒感とはたとえばメーストルが一八二二年国王に宛てた覚え書きなどに説明されている。 *Mémoire sur la situation et les intérêts de S. M. le Roi de Sardaigne, à cette époque*, OCJM, t. XII, pp. 321-336. なかっ彼のフランスへの親近感にもかかわらず、フランス人はいずれも彼を「外国人」としてとらえていることをつけ加えておくべきであろう。それは後述するようにルイー八世からメーストルへの「協力」依頼によっても、またボナルドとの間の書簡によっても観察できる。また後年サント＝ブーヴは次のように記す。「外国人であるメーストル氏が我々の言語（＝フランス語）をかくも見事に駆使することも、『夜話』を知らば、驚くことではなないであらう。」 *Portraits littéraires*, Pléiade, p. 442.
- (22) たとえば一七七七年に行われた彼の演説は明瞭にルソーの影響を示している。（F. Descostes, *J. de Maistre avant la Révolution*, t. II, chap. XI.）だが革命後、一七九五年には『社会契約論』の過激なまでの批判者として著作を世に問うた。
- (23) Jean-Louis Darcel, “Présentation”, in J. de Maistre, *Ecrits sur la Révolution*, P. U. F., 1989, p. 16.
- (24) Lettre 482, à Mme de Buttet, sa sœur, St.-Petersbourg, 29 juillet 1816, OCJM, t. XIII, p. 417.
- (25) メーストルの革命について François Descostes, *Joseph de Maistre pendant la Révolution*, Tours, A. Mame et Fils, 1895; Jean-Yves Le Borgne, *Joseph de Maistre et la Révolution*, Brest, 1976, また革命期やフランス革命について P. Demichelis et J. Lovie (éd.), *La Savoie de 1792 à 1815*, Chambéry, Société savoisienne d'Histoire et d'Archéologie, 1969; Jean Nicolas (éd.), *La Révolution française dans le duché de Savoie*, Université de Savoie, 1989 なども参照した。
- (26) 折からトリノは、王弟アルトゥー伯と共に多くのフランス亡命貴族が集結して反革命の一大中心地となっていた。 Ghislain de Diesbach, *Histoire de l'Emigration 1789-1814*, Perrin, 1984, pp. 430-453. ややその後に一五世やその子アルトゥー伯やプロヴァンス伯などもサヴォワ王家から王妃を迎えて、両王家の間には密接な関係が存在していた。
- (27) Henri de Maistre, *op. cit.*, p. 163; Jean-Louis Darcel, “Pourquoi Joseph de Maistre est-il devenu contre-révolutionnaire?”, in *La Révolution française dans le duché de Savoie*, Chambéry, ADUS, 1989, pp. 139-154. 後者の論考は、一七九二年情勢下ではメーストルが革命勢力の攻撃対象となるはずはなかったことを指摘した後、それにも

かわらず彼が直ちにサヴォワを離れた理由として、彼の政治信条が開明的であったとはいえ、漸進主義的であったことを一七八八年の彼の二つの論文から指摘する。すなわち彼は保守的改革主義者であって、革命という手法とは八九年以前から相容れぬ立場にあり、革命は君主制の消滅と権力の無秩序な暴走を惹起するであろうことを危惧していた。その意味においてメーストルの言動は首尾一貫したものであって、その行動は深い信念に根ざしたものであると。

- (28) *Carnets*, 22 septembre 1792, p. 18. このふがいない軍事的抵抗の不在ないしは失敗が、ローザンヌに移ってからメーストルが著す「愛国的」論文『軍人の肉親より国民議会への呼びかけ』の背景にあることは間違いない。

- (29) *Adresse de quelques parents des militaires savoisiens à la Convention nationale*, OCJM, t. VII. (1794)

- (30) *Lettre 221*, au Comte Deodati, St.-Petersbourg, 16 juillet 1807, OCJM, t. X, p. 442

- (31) ローザンヌ、正確にはヴォー地方に革命が波及するのは一七九八年のことであるから、メーストル滞在中は反革命勢力にはなお安全な地域であった。

- (32) *Lettres d'un royaliste savoisien à ses compatriotes*, OCJM, t. VII. とりわけ「第四の手紙」はピエモンテ政府の優越性とその進歩的政策を説く。さらに後年、次のようにも記すであろう。「サルデニア国王陛下の諸邦ほどよく統治されている国はヨーロッパにはなかった。宗教、警察、司法、財政、とりわけ刑法など、識者達の支持さらには賞賛に値しない行政機構は一つとしてなかった。したがって我々は憲法などというものは毫も必要としていなかったのである」*Lettre 376*, au Sénateur de Weydmeyer, St.-Petersbourg, 19 avril 1814, OCJM, t. XII, p. 421なおこの『王党主義者からの手紙』の中で、職務のゆえに故郷を離れなければならなかった軍人を擁護する論理は、作者の政治的戦略であり司法官であった彼自身の立場の合理化であったのではないだろうか。彼はいわゆる「命貴族」と見なされて財産を没収されていたから、職務を強調することはその状況を打開するためでもきわめて重要なことであった。

- (33) *Lettres d'un royaliste savoisien*, OCJM, t. VII, p. 54 (*Adresse de quelques parents des militaires savoisiens à la convention nationale des Français*.)

- (34) メーストルは共同体に対する二つの愛着の態度に共に *patriotisme* という語を使用しているのであって、一つは概念の中に二つの段階を想定しているのである。この点に関しては以下の著作が *patrie* の持つ意味の二重性を歴史的にたどって示唆に富む。Jean de Viguerie, *Les deux patries*, Dominique Martin Morin, 1998.

- (35) Lettre 23, au Baron Vignet des Etioles, Lausanne, 9 décembre 1793, *OCJM*, t.IX, p.59. この一節は地方に対する愛着が、国を前提とする概念的な集合ではなく、具体的な人々に対したものと読むことができるだろう。なお「愛国心」にこのような二重構造が生じる理由として、*patrie*, *pays*, *nation*などの用語が持つ曖昧さないしは複雑さがあげられる。それがフランス革命以後急速に進展した「国」の概念及び実態の変化によっていることはいうまでもない。なお *patrie* と *pays* については、後述するように、メーストル自身がペテルスブルグ時代に論文を草している。それによれば前者が社会関係を前提とするのに対し、後者は物質的な次元にあるとされる。
- (36) Cf. Cioran, "Joseph de Maistre, essai sur la pensée réactionnaire", *Exercices d'admiration*, Gallimard, 1986, p.16.
- (37) *Lettres d'un royaliste savoisien*, *OCJM*, t.VII, p.139. 「ガリア地方」とはアルプス以南でフランス語を使用する地方を示す。
- (38) かなり後年のことにはなるがメーストルは「国民nation」という語について次のように記している。「国民とは何でしょうか。友よ。それは君主と貴族のことでしょう。人々の声は耳にすべきかもしれませんが、それを斟酌すべきではありません。」*Lettre à M. le Chevalier de St.-Réal, St.-Petersbourg*, 22 décembre 1816, *OCJM*, t.XIV, p.8. 啓蒙思想とは相容れない立場であろう。このような彼の国家観が一八世紀のものであることは明らかにしても、同時代人の中にも新しい思想に共鳴する者は多かったし、サヴォワの独立を希求してピエモンテからの離脱という形で、フランス革命に同調する者も存在したのだ。Cf. François Furet et Mona Ozouf, *Dictionnaire critique de la Révolution française*, Flammarion, 1988; Gérard Gengembre, *La Contre-Révolution ou l'histoire désespérante*, Imago, 1989, p.57; Guy Hermet, *Histoire des nations et du nationalisme en Europe*, Seuil, 1996, pp.85-113.
- (39) *Considérations sur la France*, (1797), *OCJM*, t.I, chap. VI, p.74. このよびな考え方が、メーストルの政治信条に反して、きわめて先進的、ロマン主義的なものであることは、注目に値する。
- (40) *Etudes sur la souveraineté*, *OCJM*, t.I, pp.311-554. メーストルによれば「主権」ないしは「至上権」は人類の歴史と共に存在し、人類の歴史は社会の誕生と共に始まった。つまり至上権は社会と不可分の関係にあって、それは君主が保有する本質的な力である。

(41) 「先例＝偏見」の原語は *préjugé* (s) である。現代語では「潜入主」「偏見」などと訳することが一般的で、特殊な例として「先例」の意味があるが、一八世紀末、フェローの記述によれば特に司法の分野での「判例」ないしは「先例」の意味が主要であったとされる (Abbé Féraud, *Dictionnaire critique de la langue française* (1788), Tübingen, Niemeyer, 1994)。また一八二二年刊行のアカデミーの辞書(第五版)にも語義としては第一に「先例」が掲げられ、第二に「検討されることなく受け入れられる考え」を示す。『主権論』におけるこの語の用法に否定的な意味が込められていないことは明白であって、個の判断以前にあらかじめ存在している判断を示すといえるだろう。それは単に時間的に先行することのみならず、歴史伝統によって裏打ちされて、共同体内部で支持され通用する観念を意味している。メーストルの司法官としての経歴を考慮しても「先例」の意味は身近なものであったに違いない。しかしながら一八世紀啓蒙思想はこの *préjugé* (s) を、自由を疎外する硬直化した旧弊な思考と位置づけて攻撃していたのだった。否定的な「偏見」としての意味である。この論調は、フランスのみならず、全ヨーロッパにおよんでいる (Michel Delon, "Préjugé", in *Dictionnaire européen des Lumières*, P.U.F., 1997, pp. 898-899)。メーストルがこの語を使用することになった直接的契機が、一七九〇年に刊行されるや大ベストセラーになり、フランスでも直ちに翻訳出版されたバークの著作であることは明らかであろう。そこではこの語が (原文では *prejudice* (s) が翻訳では *préjugé* (s) とされた。Edmund Burke, *Reflections on the Revolution in France*, Penguin, 1968, p. 183; *Réflexions sur la révolution de France*, Pluriel, 1989, p. 110. ただしこの仏語版は新訳である。) が革命思想を批判する重要な概念として用いられていた。(なおメーストルとバークの反革命論の関係については Franck Lafage, *Le comte Joseph de Maistre* (1753-1821), *Itinéraire intellectuel d'un théologien de la politique*, L'Harmattan, 1998, pp. 65-68 を参照のこと。) バークの措辞が啓蒙主義的含意を意識しなかったはずはなく、その意図はきわめて挑戦的であり、革命肯定論者達の神経をことさらに逆なでしようとするものであったといえるであろう。それはメーストルの著作においても同様であるに違いない。したがって、適当な訳語を見つけることは困難ではあるが、以上のような重層的な意味をふまえてここではこの語を「先例＝偏見」と訳しておくことにする。ただしメーストルの反革命理論は「先例」たる歴史を尊重するという「歴史主義」の原則にも関わらず、歴史的現実には他ならぬ革命を否定するという矛盾を抱えていた。「先例＝偏見」の語は、メーストルの思想が持つ特質を照射する光源としてきわめて興味深い。Cf. G. Gengenbre, *op.cit.*, p. 242.

- (42) *Etudes sur la souveraineté*, OCJM, t.1, p.377.
- (43) *Considérations sur la France*, OCJM, t.1, p.1.
- (44) *Fragments sur la France*, OCJM, t.1, p.208. (1794-95)
- (45) Cf. Jean-Yves Pranchère, *Qu'est-ce que la royauté*, Joseph de Maistre, Vrin, 1992.
- (46) 『フランス革命の効用』 *Bienfaits de la Révolution française* 一七九四年『フランスに関する断章』 *Fragments sur la France* 一七九四年『フランスに関する考察』 *Considerations sur la France* 一七九六年。いずれもOCJMに所収。
- (47) *Réflexions sur le protestantisme*, OCJM, t. VIII, (composées vers 1798).
- (48) Cf. Lettre 487, au Comte de Vallaise, St.-Petersbourg, (2 octobre) 1816, OCJM, t. XIII, p.434. なおメーストルの政治的なことは宗教的論考が挑発的な断定や、激烈なまでの誇張に満ちているのに対して、その私信が家庭的な家父長としての思いやりや友人としての厚き情にあふれていることは、彼の精神構造や、革命が彼にもたらしたものの意味を考える上で興味深い。
- (49) *Considérations sur la France*, OCJM, t.1, p.457. 彼の反革命論者としての位置については以下のものを参照せよ。 Jacques Godechot, *La Contre-Révolution, doctrine et action 1789-1804*, P.U.F., 1961; Jean-Jacques Chevalier, *Histoire de la pensée politique*, Payot, 1979; G. Gengembre, *op.cit.*; Jean Tulard (éd.), *La Contre-Révolution*, Perrin, 1990; Jean-Clément Martin, *Contre-Révolution, Révolution et Nation*, Seuil, 1998.
- (50) *Carnets*, 30 avril, 1796, p.113. (カタカナは原文大文字) ただし君主が異民族の土地を支配するという現象は決してまねではなかったし、現実政治の実例をメーストル自身もよく認識していた。後年のテキストであるが次のように記している。「革命当初、この地域(＝ヨーロッパ)を支配する君主達は、唯一フランス国王を除いて、通常外国人でありました。」 *Mémoire sur la situation et les intérêts de S. M. le Roi de Sardaigne*, OCJM, t. XII, p.334. 彼にとって事態が深刻であったのは、サヴォワ王家が領地との間にそれまで存在していた民族的同一性を完全に失ってしまったこと、しかも大陸からしめ出され地中海上の貧島に追いやられてしまったことにあるだろう。すなわち栄えある王国の伝統が喪失されたのである。

- (15) *Ibid.*
- (16) *Carnets*, 18 septembre 1797, p.124.
- (17) *Carnets*, (6) février 1798, p.127.
- (18) Lettre 260, au Chevalier de Rossi, St.-Petersbourg, mai 1808, *OCJM*, t.XI, p.109.
- (19) J. Mandoul, *op.cit.*, p.47.
- (20) 正確には次の三語である。一、国王が領有していた諸邦の復活、二、補償。三、大陸における国王の安全保障。四、朝廷費の確保。 *Revue des études maistriennes*, No.11, 1990, pp.106-107.
- (21) J. Mandoul, *op.cit.*, Livre IIを参照のこと。
- (22) ただしイタリヤ半島の関心はサント・ピエロ・ディ・パオロに統一的な戦略ではなかった。 J. Mandoul, *op.cit.*, p.172)
- (23) Lettre 251, au Chevalier de Rossi, St.-Petersbourg, 20 janvier 1808, *OCJM*, t. XI, p.29.
- (24) Lettre 249, au Chevalier de Rossi, St.-Petersbourg, janvier 1808, *OCJM*, t.XI, p.22.
- (25) Lettre à Mlle Adèle de Maistre, St.-Petersbourg, 12 août 1804, *OCJM*, t.IX, p.202.
- (26) Lettre à M. le Comte de Roburent, 29 mai 1805, *OCJM*, t.9, p.414.
- (27) Lettre 146, au Chevalier de Rossi, St.-Petersbourg, 6 avril 1806, *OCJM*, t.X, p.88 sq.
- (28) Lettre 179, à Mlle Adèle de Maistre, St.-Petersbourg, 8 octobre 1806, *OCJM*, t.X, p.213.
- (29) Cf. Pierre Vallin S.J., "La place des Soirées dans l'histoire des théologies chrétiennes", in J. de Maistre, *Les Soirées de St. Petersbourg*, Slatkine, 1993, pp.51-67.
- (30) 善悪が存在の犠牲に与って実現される贖罪を考察した『犠牲に関する説明』(一八一〇) *Eclaircissement sur les sacrifices*, *OCJM*, t.V, pp.283-362をまた、フランス革命をうかに歴史的小の意味でみるかという、メーストルの問題意識の現れである。また『夜話』と並行して執筆される『摂理の顕現するものの猶や』 *Sur les délais de la justice divine*, *OCJM*, t.V, pp.361-470は彼の関心の所在を明らかにする。そして彼自身の苦境が投影をなしていることは疑いを入れない。
- (31) Lettre 313, à l'Amiral Tchitchagof, St.-Petersbourg, 1er septembre 1810, *OCJM*, t.XI, p.481 (*Dissertation*

sur le mot: PATRIE.) なお伝統的社會關係の變化が忠誠意識にいかなる混迷を惹起したか、異なる時空の現象を扱うものではあるが、丸山眞男『「忠誠と反逆」』筑摩書房、一九九二の觀察は多くの示唆に富んでいる。

(68) *Ibid.*

(69) グヂヤハエとて故郷を去ることをはなへ、一八二六年から三九年までサヴォワに戻り、再びロシアに渡って五二年に没す。その郷愁はつや増えざるべし。A. Berthier, *op.cit.*, III, IV.

(70) *Carnets*, 13 février 1807, p.175.

(71) *Carnets*, 5 mars 1812, p.195.

(72) Lettre 110, au Roi Victor-Emmanuel, St.-Petersbourg, 29 mai 1805, *OCJM*, t.IX, p.421.

(73) Lettre 273, au Chevalier de Rossi, St.-Petersbourg, 16 décembre 1808, *OCJM*, t.XI, p.180.

(74) *Mémoire du 19 octobre 1813*, *OCJM*, t.XII.

(75) Blanc, *Mémoires*, p.129 cité par François Bayle, *Les idées politiques de Joseph de Maistre*, Domat Montchrestien, 1945, p.51

(76) Lettre 136, au Chevalier de Rossi, St.-Petersbourg, 19 janvier 1806, *OCJM*, t.IX, p.48

(77) Lettre 260, au Chevalier de Rossi, St.-Petersbourg, mai 1808, *OCJM*, t.XI, p.97.

(78) J. Mandoul, *op.cit.*, p.227.

(79) *Note verbale à Son Excellence M. le Conseiller privé, Comte de Nesselrode*, 22 août 1814, *OCJM*, t.XII, p.445. 彼の三分割はフランス、サルディニア、それにスイスを全頭に置いたものでもなへ。

(80) Lettre 411, au Comte de Vallaise, St.-Petersbourg, 1815, *OCJM*, t. XIII, p.83.

(81) Lettre 545, au Vicomte de Bonald, Turin, 29 mai 1819, *OCJM*, t.XIV, p.167. 書簡が同郷の肉親にではなくフランスの反革命思想家ボナルドに宛てられてゐる事に注目した。

(82) J. Mandoul, *op.cit.*, p.160, p.255, etc.

(83) ロシア滞在中にフランス国王からメーストルに協力の要請があったものの、色好い返事をしなかったためにその寵を失うという経緯があった。忠臣は二君にまみえず。彼がサヴォワ王家の家臣であるという立場はいささかも揺るがなかった。

パリではルイ十八世に謁見を許されるが、こうした感慨は催さない。しかしながらフランスは彼にとって最も近い国であり続ける。「私と疑いもなく最もフランス的で、フランス正当王位継承権に最も執着する外国人である。」(Lettre 543, à Bonald, Turin, 22 mars 1819, *OCJM*, t. XIV, p. 159. 『教皇書簡』の中でもフランスを範と仰いで論を進めつつある(Ex. *Du Pape*, Préliminaire, *OCJM*, t. II, p. XXV.)°

- (4) *Carnets*, 28 août 1817, p. 206.
- (5) *Souveraineté*, liv. I, chap. III (1795-95), *OCJM*, t. I. .
- (6) Lettre 529, à Bonald, Turin, 15 novembre 1817, *OCJM*, t. XIV, p. 114.
- (7) Lettre 550, au Comte de Marcellus, 9 août 1819, *OCJM*, t. XIV, p. 183.
- (8) Lettre du 8 septembre 1819, citée par Jean-Louis Darcel, "Genèse et publication des Soirées de Saint-Petersbourg", in J. de Maistre, *Les Soirées de Saint-Petersbourg*, Slatkine, 1993, p. 21.
- (9) *Du Pape*, *OCJM*, t. II, p. 265.
- (9) *Ibid.*, p. 412.
- (10) Lettre 576, au Marquis d'Azeglio, Turin, 21 février 1821, *OCJM*, t. XIV, p. 259.